

負う・負わせることなく分かち合う

関野文子 せきのあやこ / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

食物を分けることは狩猟採集民社会ではあまりに当たり前の光景である。しかし、その裏には人々のひそやかな交渉や心の動きが隠されている。分けることと負目の関係について人々の会話や行為から考えてみよう。

日常的な料理の分配

「日本ではふだん、家で料理を作っても周り近所に配ったりはしない」というと、驚かれる。カメルーンの熱帯雨林地域に暮らす狩猟採集民バカの人々にとって料理を作って分けることはごく日常的な当たり前のことである。ふだん料理をあげる人を聞いてみると「私は〇〇、△△、××、□□……にあげる」と優に5人以上の名前がでてくる。かといって、近い親族にあげるのだとか、仲の良い人にあげるのだといった、分配に関する一般的なルールが語られるこ

とはない。

定住集落での彼らの食事は、キャッサバのイモや甘くないブランテンバナナを茹でた、いわゆる「主食」と、キャッサバの葉や、ココと呼ばれるタンパク質が豊富な野生植物の葉、キノコ、獣肉や川魚、川エビなどを組み合わせた煮込みおかずである。味付けには、森のナッツのペーストやアブラヤシなどの油脂調味料が使われる。料理ができあがり、ある程度の量があれば4、5人くらいに分ける。母や姉妹、夫の姉妹など親族関係の近い人たちから、そうではない人たち、一時的な訪問者などにも分けられる。男性たちが集まっている場所があれば、そこに持っていくこともある。

平等社会と分配

狩猟採集社会は、平等的な社会であるといわれてきた。平等であるということは、たんに持ち物が少ないからといったことではなく、食べ物の頻繁な分配をとおした経済的な平等と、リーダー的な人が生まれに

くいという社会的な平等が両立しているということを指している。バカのところで初めてフィールドワークをすることが決まった頃、私は研究テーマについて悩んでいた。指導教員に、平等社会の変容について知りたいと話したところ、「初めての調査で『平等社会』とか『変容』を見ようとしても、うまくいくだろうか」「なにか具体的なものを見ないと分からないだろうから、まず食物分配の調査をしてはどうか」と助言を受けた。もっともな指摘である。言葉も分からない土地にいて、いきなり「平等社会」「変容」といった漠然としたものを見ようと思っても何も見つからない。生態人類学や地域研究で重視される姿勢とは、現地の人々の話を聞くだけではなく、人々の日常の営みをつぶさに観察し、自らも参与することである。さらにその観察を具体的なものとするため、数を数えたり、量を測ったりして定量化することも重要であると教わった。そこで私はまず、食物分配について調査をすることにした。170人ほどの人口の村を調査地に選んだ。バカたちは実に頻繁に食物分配をしていた。しばらくすると、私もその輪に入れてもらい、毎日食べきれないくらいの料理をもらうようになった。

定住集落での料理の分配

バカの人々は、かつては森のなかでの移動をベースにした狩猟採集生活をおくっていたが、定住化の進んだ現在、一年のうちのほとんどを幹線道路沿いの集落で暮らしている。しかし、現金収入源としても重要な果実であるブッシュマンゴーが実る時期や、狩猟、漁労が盛んになる乾季には、森で数ヶ月のキャンプをすることもある。狩猟は主に男性が、採集は女性が行う。定住集落での食生活では農作物が多くを占める。畑ではキャッサバやブランテンバナナなどの主食作物を育てており、近隣農耕民から農作物を入手することもある。分配される食物の内訳をみると主食が6割、植物性のおかずが3割、肉や魚は合わせても1割に満たなかった。このように定住集落の食生活の特徴は、農作物が多くを占めている点にある。

食物が分配される理由の一つとして狩猟採集に伴う不確実性や不安定性を挙げることができる。例えば、狩猟では、獲物が獲れるときもあれば、獲れないときもある。しかし、複数人で分配をすることによって、不確実性を減らし、個人が得られる獣肉の偏りを小さくすることができる。一方、比較的簡単に手に入れることができ、そこそ



軒先でキャッサバの皮をむく女性。近くには他の女性や子どもが佇んでいる。



蒸したヤマノイモの形や大きさを見ながら、お皿に盛り付ける。

*写真はすべて筆者撮影。



料理を運ぶ子ども。男の子も女の子も物心がついた頃から料理を運ぶ。



バンジョと呼ばれる屋根付きのたまり場集まる女性と子どもたち。女性も男性も子どももこうして密着して集まる。

こ安定的に供給される農作物や森の植物性食物がなぜ頻りに分配されるのかは、上記の理由から説明することは難しい。しかも、同じ種類の主食や似たようなおかずを分配し合ったりすることも珍しくない。もちろん、高齢者など生業活動をあまりしない人は、料理をもらうことの方が多い。しかし、多くの場合、一見すると分けなくてもよいのではと思えるような間柄で頻りに分配されているのである。このような状況の背景には、調理前後における人々の行為が存在している。

調理場の微妙な空気感とさりげないやりとり

バカの女性たちは、家の中か外で焚き火をして料理をする。料理中には、他の家の女性が、臼や杵を借りに来たり、ただ雑談しに来たりと人の出入りが多い。しかし、それは料理中だけである。料理が終わる頃になると、近くにいた人はどこかへ去ってしまう。できあがりの頃にその場にいたとしても、無言で外をぼーっと眺めているというように、料理した食物に興味を示していない態度をとる。料理ができあがると調理者の女性は、その時の料理の量、上述のような周囲の人の様子や態度、その日行動を共にした人などを勘案しながら、誰に分配するかを決める。料理を盛り付けると、子どもに指示して特定の人のところに運ばせる。料理中に調理場の近くや家の軒先などに座り続けていた人は、高い確率で分配にあずかることになる。

このように調理場をとりまく分配の場では、人々のさりげないやりとり、相互行為がなされている。それは、単に言葉によるコミュニケーションだけではなく、目線や身体の向きといった身体動作とおしたコミュニケーションも含む。ただ黙って座っているだけだとしても、何らかのメッセージが伝わっているのである。バカたちの食

物分配は、言葉で要求したり、あからさまな態度をとったりして相手から何かを引き出そうというものではない。ちょっとした行為の結果として、相手が自ら動くことを期待するといった微妙な空気のなかでおこなわれるやりとりなのである。

分配における負目

さいごに食物分配における負目について考えてみよう。食物分配のときに、バカが負目を感じているようなあからさまな態度をとることはないし、そもそも通常の分配の様子から負目を読み取ることは難しい。料理の分配はごく日常的で、特別な贈り物ではないからだ。料理をあげる時、もらう時、人々は素っ気ない態度を保ちつづける。仰々しくお礼を言ったり、これみよがしに料理をあげたりすることもなければ、受けたことに対するお返しをすることもない。

だからといってバカの人々に負目の感情がないわけではない。たとえば、獣肉など価値の高いものを持つ者は、人目に付かないようにそれを隠す。ふつう負目は、ものをもらった者が与えた者にたいして抱く感情だと想定されているが、バカが負目を感じるの、むしろ、ものを持っているときであるように思われる。食物を持たない者が抱く欲求を、食物を持つ者が感じとり、相手に欲せられているという心の負担として負目があらわれるように思えるのである。食物を持たない者を前にして、食物を持つ者は「あなたが欲しいと思っていることを私は知っていて、あなたも私がそれを知っていることを知っている」と考える。このように周囲の人々の状況を把握し、感情の動きを推測することで、食物を持つ者は「持っていること」にたいして負目を感じるのではないだろうか。

そのような負目を持ちながら料理をしている人の周囲にいる人々は、あくまで調理者の自発性に分配の成り行きを任せようと

する。そこで重要なのは、あからさまな働きかけとおして相手から何かを引き出そうとする交渉術ではなく、さりげない振る舞いを通じて相手の自発的行為を引き出すことである。結果として分配されることもあれば、分配されないこともある。しかし、まるでその結果に影響されていないかのように振る舞う。このような分配をとりまく場は、与える者と受け取る者の二者関係だけで成り立っているのではなく、分けられなかった者も含む、人々の相互行為から成り立っているのである。

こうして分配がなされると、その時点で与え手の感じている負目は解消されてしまう。つまり、分配を駆動する負目は、今、ここにおける非対称な関係においてのみあるのであり、分配が終われば風のように去っていくのである。食物をもらった者に負目が残ることはなく、したがって後々の人間関係に影響することもない。

ここまでバカの分配における負目について考えてきたが、では負目がバカの分配における最大の駆動力なのだろうか。もしそうだとすると、食物の非対称性に起因する負目と前述のような一見すると分けなくてよいものを分けるということは、いささか矛盾してしまうように感じる。むしろ、バカたちにとっては負目よりも、料理の分配をめぐる相互行為そのものが分配のモチベーションになっているのではないだろうか。人々は狩猟や採集、農作業など何かをするときには、きまって誰かと行動を共にする。分配はこのような日常生活の一連の流れの一部としてある。さらに分配に至るまでに、その日にあったことなどについて取り留めのないおしゃべりをし、大人が直接料理を持っていくときには相手の様子確かめることもある。バカたちは負目を蓄積することなく、常に分配をすることで、互いの状況を確認しあい、相互の関係を維持、構築しているのである。

